

No	提 案 名	提案団体名	
		代表者氏名	所 属
4	歩きたくなるまち—宇都宮—を目指して	宇都宮共和大学 山島ゼミ2年	
		堀川 真実	宇都宮共和大学シティライフ学部
		指導教官 氏 名	山島 哲夫

1 提案の要旨

宇都宮市の中心市街地は、賑わいがなく、歩行者が楽しくまちを散策している姿を見かけることが少なくなった。まちを楽しみながら歩いている人が少ないのは、宇都宮の中心市街地に人々が歩きたくなるような場所や仕掛けがないからである、と考えられる。多くの都市でみられるペットを連れて散歩している人も、宇都宮のまち中ではあまり見かけることがない。

私たちのゼミでは、魅力的なまちはどのようなまちなのか、まちを実際に歩いて考えてきた。その中で、まちとは人々が歩いているところであると考えようになった。居心地の良い魅力的なまちには、多くの人が様々な出会いや新しい発見などを求めて集まってくる。クルマで買い物に出かける場所が「まち」なのではない。

魅力的なまちの代表といわれている吉祥寺のまち、渋谷や原宿、新宿、銀座などまちはいつ行っても多くの人が歩いている。人がたくさん歩いているから、そこに、さらに多くの人が訪れるようになる。

宇都宮のまち中は、なぜ、多くの人が歩いていないのか。その原因を探り、まち中を人が歩くための工夫（方策）を考える必要がある。しかも、宇都宮のまち中の歩行者通行量は近年急速に減少しているというデータがある。これは、宇都宮のまち中にとって大きな問題であり、まち中に人が訪れるようにすることは宇都宮のまちの活性化を図る上で重要な課題であると考えた。

私たちは、歩行者が歩きたくなるためには、歩くことの「安全性（歩きやすさ）」と歩くことが「楽しい」という2面から検討する必要があると考えた。本提案では、この2つの側面から「歩きたくなるまち」を提案する。

人々が訪れないまちは、衰退していかざるを得ないことは目に見えている。宇都宮のまち中に人々が楽しく散策できるようにするために本提案を行うものである。



写真1 人通りがないまち：宇都宮大通り



写真2 人であふれているまち：原宿

2 提案の目標

宇都宮のまち中を多くの人が歩きたくなるようにすることが本提案の目標である。そのため、本提案では、まず、まち中を歩きたくならない理由を探った。また、歩きたくなるまちの条件を検討した。これらを踏まえて、宇都宮を歩きたくなるまちにするために必要な方策について提案を行った。さらに、釜川をとりあげ、「釜川マルシェ計画」を提案した。

まち中の居住者の人口構成は、高齢化が進んでおり、まち中に若い世代が少なくなっている。高齢者も歩きやすいまちでなければまちに出てくるものがなくなる。宇都宮のまちもこのまま推移していけば、ほかの多くの地方都市と同じように衰退していく恐れがある。宇都宮の中心市街地が老若男女を問わず誰もが歩きたくなるまちになることで、まちに再び賑わいをもたらす、「住めば愉快」な宇都宮にすることが可能となる。

もちろん、まち中に人が歩かなくなった理由は、まち全体の構造、クルマ社会、郊外ショッピングセンターの開発ラッシュ等様々な要因があり、まち中を歩きたくなるようにすることだけで、解決することはできない。しかし、まち中を人が歩きやすくする工夫を行うことで、多少でも人が多く歩くようになれば、そのことが長期的に、まち中の活性化につながることは明らかであると考ええる。

3 現状の分析と課題

私たちは、本提案に当たり、宇都宮のまち中を歩行者の目線から調査した。まちを歩くのは歩行者である。歩きやすくする工夫も歩行者目線で行わなければならないと考えるからである。

3.1 歩く人が少なくなっている宇都宮のまち中

宇都宮の中心市街地の平日歩行者通行量は昭和 57 年をピーク（146,204 人）に平成 5 年までは横ばいで推移してきたが、それ以降減少が激しく、平成 21 年には 6 万人を割り込んでいる（59,310 人）。また、休日歩行者通行量も、ピークである昭和 61 年の 202,822 人から、61,788 人へとわずかに 3 割になってしまっている（図 1：平成 22 年 3 月宇都宮市中心市街地活性化基本計画（案）より。いずれも中心市街地 17 地点の合計数値）。特に、近年減少の度合いが激しさを増しており、このままでは、宇都宮市の中心市街地は、ほとんど人の通らないまちになってしまう。

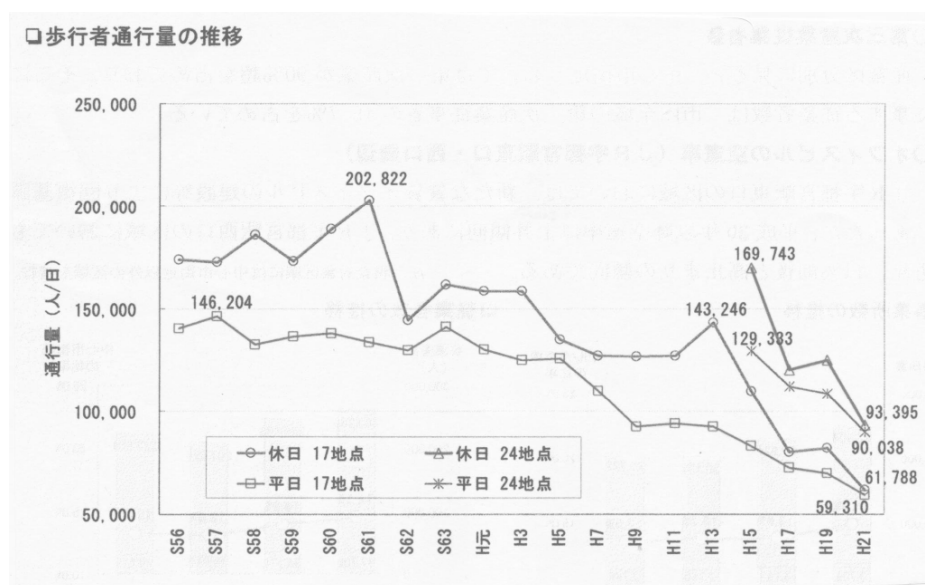


図 1 宇都宮市の中心市街地歩行者通行量の推移

宇都宮市の小売商業販売額でみても、平成9年には、中心市街地の占める比率が21.2%であったものが、平成19年には14.0%と大きくその比率を下げている（商業統計調査）。まち中の歩行者通行量の減少とともに、商業機能も大きく衰退しつつあるのである。

多くの地方都市で、中心市街地の衰退が言われており、シャッター通りと化している中心商店街も数多い。しかし、一方で、宇都宮と同規模のまちでも歩行者が中心市街地を楽しく散策しているところは多く見受けられる。まち中が歩きやすく楽しければ、人は訪れるのであり、宇都宮でも決して不可能ではないと考える。

3.2 なぜ歩きたくないのか

私たちのゼミでまち歩きをしながら感じた点を列挙する。

○安全・快適に歩けない（歩きやすさの問題）

・自転車の存在

宇都宮のまち中には、自転車が高速で走行しており、しかも、朝夕の登下校時には大量の自転車が一定方向に猛スピードで走っていく。とても、ゆっくり歩ける状態ではない。自転車と歩行者の分離を確実にする必要がある。自転車と歩行者の接触事故は全国的にも増加の傾向があり、今後ますます増加する恐れがある。警察庁の資料によれば、交通事故件数が平成10年から平成20年にかけて803,878件から766,147件へ約5%減少したにもかかわらず、自転車対歩行者の事故件数は661件から2,942件へと4.5倍に増加している。

・歩道の安全性の問題

舗装がところどころ壊れていて、うっかりすると引っかかってしまうところがみられる。また、雨の後に水溜りになってしまいうところも多い。今年は大雨の日が多かったが、雨が上がった後でも、多くの水溜りが生じていた（宇都宮共和大学から宇都宮駅に行くまでのわずかの距離にも多数の水溜りがあった）。歩道の幅員も十分な広さがあるとは言えない。

人々が安全に、そして、ゆっくりと散策できる歩行者のための道が必要である。

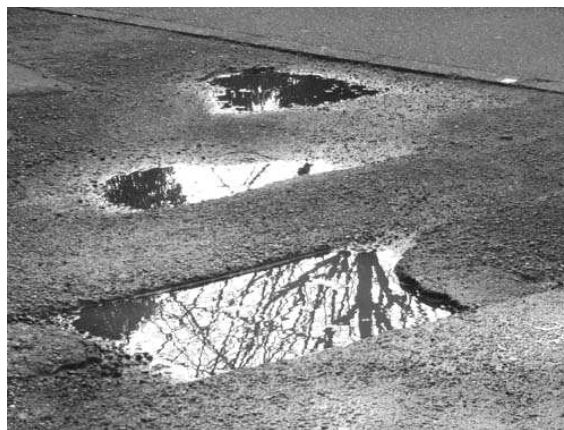


写真3 歩道の水溜りの例

・休憩スペースがない

人々がまちを歩いていて、ちょっと休憩したいと考えたときに、休める場所が少ない。宇都宮のまち中では、人々が集まって談笑している風景などにはめったに会うことがない。ベンチで休んでいる人も見かけることが少ない。座りたくなるベンチ自体非常に少ない。二荒山神社前や

オリオンスクウェアなどのごく限られた場所を除いて、ベンチに腰を掛けている人を見つけることがほとんどない。

○歩いていて楽しくない

宇都宮のまち中は、単調であり、歩いていても景色が変わらない。他のまちを歩いている時と比べて、宇都宮のまちを歩いていると疲労感がたまってしまう。その理由を考える。

・貧弱な街路樹

宇都宮の街路樹は他の都市と比べて非常に貧弱であり、植えられていても、枝は短く切り落とされており、街路樹の本来の機能を果たしていない。このことは、従来からも数多く指摘されているところであるが、まちを歩いて楽しくない大きな理由となっている。



写真4 イチョウ通りと名前が付けられている南大通り：宇都宮



写真5 通常のイチョウの街路樹：高崎市

・まちを歩いていて新たな発見が少ない

人々がまちを歩きたくなるためには、街路樹や休憩スペースなどが整備されていて居心地の良いことが非常に重要であるが、さらに、歩いていて新たな発見等があることがまちを歩く楽しみになる。賑わっている商店街などでは、各商店が頻繁に模様替えや新しい試みを行っており、常に新しい発見がある。一般のまちでも、花が植えてあったり、ちょっとした飾り付けが行われていたり、歩く人の心を和ませる工夫がある。普通のまちでも、来街者に配慮されているところを歩くのは心地よいものであり、歩いていても疲れを感じない。例えば、長野県の小布施町のように、まち全体で来街者を意識した様々な試みを行っている都市も数多く存在しているのである。宇都宮のまち中には人を楽しませる工夫を行っているところは非常に少なく感じられる。

宇都宮のまちを歩いて楽しくない最大の理由は、宇都宮のまちの人々が、「まちは歩くところである」という意識があまりない点にあるのではないかと考える。まちとは、クルマで出かけて買い物をするところであるという認識を持っている人が多いように感じる。まちを、人々が歩きながら楽しむ場所とは考えていない宇都宮市民も多いのではないだろうか。

私たちは、ゼミの中でいくつかのまちを歩いてみて、まちとは、ショッピングセンターがあるところではなく、人々が様々な出会いや発見を求めて集まってきて、散策できる場所である、と考えるようになった。「歩きたくなるまち」とはどのようなまちなのか？

3.3 歩きたくなるまちとは

少し古い調査ではあるが、首都圏の都市生活者を対象にして、まちの魅力として「アイデンティティ」「ヒューマンスケール」「コミュニケーション」という3つの要素を取り上げて分析している調査がある（「都市居住についての意識調査」1999年東京ガスの調査）。

これを歩きたくなる要素として考えると、

- ・アイデンティティ：その地域ならではの魅力であり、鎮守の森や昔ながらの町並み、商店街の賑わいなど
- ・ヒューマンスケール：クルマに依存しない、安心して歩ける、楽しく歩ける
- ・コミュニケーション：地縁の存在、地域で行われている趣味活動、地域のイベントなどが想定できる。こうした要素が適切に整えられることにより、歩きたくなるまちが出来上がると考えられる。

宇都宮を対象にした本提案では、このうち、ヒューマンスケールのまちに重点を置いて検討を行った。

4 施策事業の提案

4.1 宇都宮のまちを歩きたくするための方策

歩きたくなるまちとするため、「歩きやすくする施策」と「楽しく歩けるようにする施策」の2つの側面から施策事業を提案する。

○歩きやすくする

歩きやすくする（安全性等）ためには、まず、歩行者が歩いていて危険でないことが大前提になる。さらに、休憩できる場所や立ち止まる場所があり、木陰などがあることなども必要である。

・歩道の整備（歩く場所の整備）

歩きやすくする第一は、歩道（歩行者の歩く道）自体を安全にすることである。はがれたタイル等を適切に維持管理することはもちろん、雨の際にすぐに水たまりになってしまう歩道の改修は不可欠である。さらに、歩行者がゆったり歩けるような広い歩道を設けることが重要と考える。

歩道に水溜りをつくらないようにするためには、歩道にわずかに傾斜をつければ済むことであり、各地で試みられている（インターパークショッピングビレッジでも取り入れられているが、歩行者はほとんど傾斜には気づかないといわれている）。

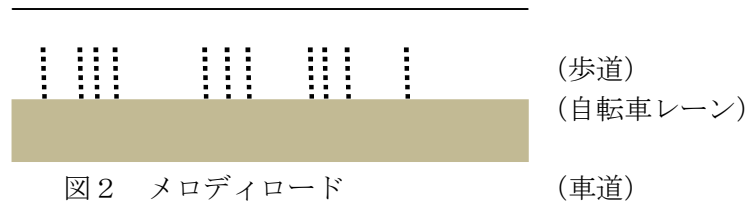
・自転車交通との分離

宇都宮のまち中を歩いていて、最も危険を感じるのが、歩行者のわきを高速で走り抜ける自転車の存在である。自転車交通自体は環境上も今後推進していくべき交通手段である。従って、自転車が危険だからと言って排除することはできない。そのためには、自転車専用道路の整備が必要であるが、それができない場所で、しかも歩行者の多いところでは、自転車がスピードを出せないように、ベンチなどを適切に配置し、障害物とする方法がある。

自転車専用道路ではなくても、宇都宮には自転車レーンが設けられているところもある。しかし、このレーンを使わず歩行者の歩く部分に多くの自転車が走行している実態もある。そこで、積極的な分離の仕掛けとして、『メロディロード』という方法を提案する。

メロディロードは、音楽を奏でる道路の仕上げ技術で、道路に溝を刻み、溝と溝との間隔の違いで音階を表現できるものである（路面の排水の向上等の効果もある）。通常は、クルマが通行する際に心地よい音を奏でるように配置される。しかし、こうした仕掛けを逆に使い、自転車が通

行すると変わった音や嫌な音を発するような配置とすることも可能である。歩道に施すことにより、自転車が通行すると音を出すことによって、歩行者に気づかせることも可能になるだけでなく、自転車を専用レーンに移させる効果も期待できる。



・街路樹の適正な管理

宇都宮の街路樹は、きわめて貧弱である。まち中の通りの中には、まったく街路樹が植えられていない道路もある（奥州街道、宇商通りなど）。夏場などに木陰を作り出すことができない街路樹ではまったく意味がないと考える。街路樹を増やすことはもちろん必要であるが、少なくとも、今ある街路樹を大切に管理していく必要があるのではないだろうか。

・休憩場所の確保

まちを散策するためには、時々休憩できる場所、あるいはベンチなど腰かける場所が不可欠であると考えます。写真6は、巢鴨の地藏通り商店街にある休憩スペースである。これからの高齢社会を考えると、高齢者もまちに出るためには、ゆっくり休憩できる場所の整備はぜひとも必要である。日本のビジネスセンターである東京丸の内のビジネス街の中にも写真7のような休憩場所があり、また、道路にもさまざまなベンチが置かれている。



写真6 巢鴨地藏通りの休憩所



写真7 東京丸の内の休憩場所と歩道上のベンチ



○楽しく歩けるようにする

楽しく歩けるためには、物理的な環境を楽しく居心地の良いものとすると同時に、そこで様々な行為・活動が可能であることが必要である。

・様々な工夫をした歩行者用の道をつくる

楽しく歩くためには、歩く場所（歩道等）が楽しいことが必要である。そのために、歩道の舗装をインターロッキングなどでカラー舗装することにより、見た目も美しくすることが考えられる（写真8）。さらに、舗装を工夫し歩きながら楽しめる模様をつけることも検討するべきである。まちごと



写真8 インターロッキングによるカラー舗装

に模様を変化させることで、地域の特徴を出すことも可能である。観光地のまちなどで試みられている、地域の特徴を出したマンホールの設置なども、注目に値する。写真9は大分県別府市のマンホールであるが、12種類の違う模様の柄（月別）をつけ、歩いていて楽しめる工夫がなされている（フラワーシティ別府）。



写真9 異なった花の図柄を入れている別府市のマンホール

・石碑の設置や舗装の工夫（詩を入れる）

宇都宮は歴史的な資産が戦災で無くなってしまっており、歴史的な景観でまちを楽しむことは難しいが、宇都宮にゆかりの人などの詩を石碑などとして沿道におけば、歴史や文化を感じながらまちを歩くことが可能にある。宇都宮市内にも、写真10のような石碑（二荒山の参道にある蕪村の俳句の碑）がある。特に歴史的ないわれなどがなくても、歩道に詩があれば、人は立ち止まって見ることになる（写真11は東京世田谷の砧公園につながる歩道に百人一首の詩がタイルに掘られて埋め込まれている）。宇都宮にゆかりのある人は多いと思われるので、市民の意見などを聞いて、その人の詩や言葉などを石畳や石碑にすることも楽しいと思われる。



写真10 二荒山神社の参道にある蕪村の俳句

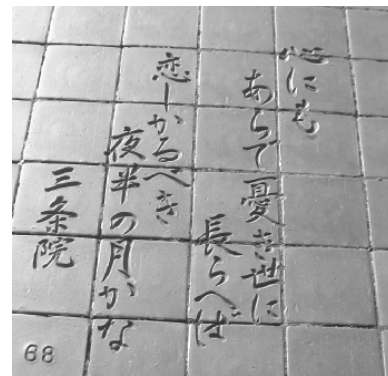


写真11 東京世田谷砧公園への道

・モニュメントを置く



写真12 東京立川（ファール立川）

まちを歩いていて人目を引くものに様々なモニュメントがある。モニュメントを見ながら散策することも大きな楽しみとなる。まち中にモニュメントを置いている代表的な都市に、東京の立川市がある（写真12 立川駅前のファーレ立川）

彫刻などのモニュメントではないが、街路灯などに花で飾りつけする試みは、宇都宮市内でも行われている。これをより大規模に実施し、通りごとに特徴のある飾り付けを行えば、まちを歩く楽しみが増すと考えられる。

・まちを彩る

まちを彩る方法としては、歩道の舗装などを工夫する方法、街路樹などを活用する方法、花壇を設置する方法などが考えられる。

宇都宮にも街路樹がないわけではない。街路樹を強剪定してしまうことが問題なのである。この街路樹と街路樹の間に花壇を設けることにより、まちを彩ることが可能である。街路樹がない通りでも花壇を置くのは比較的容易であると考えられる。さらに、街路樹にはLEDライトでかすかにでもライトアップすることで、夜の彩りを作り出すことができる。冬季の夕方など日の暮れるのが早い時期には、まちに人が出るきっかけにもなる。

まちを彩ったり飾り付ける方法は、植物でなくとも、統一されたスタイルの看板、街灯や電柱のデザインの工夫など、様々な方法が考えられる。

要は、目で楽しみながらまちを歩ける工夫をすることが大切なのである。

・食べ歩きのできるまち

まちを歩きたくなるためには、まち自体を物理的に整備するだけでなく、まちで様々な活動ができることが必要である。その一つとして、本提案では、食べ歩きのできるまちを取り上げる。

食欲は人間の三大欲求の1つであり、食べながら歩くことは大きな楽しみになる。観光地や行楽地では、その土地の名物の食べ物、ハンバーガー、アイスクリームやソフトクリームからクレープ、さらにはたい焼きや団子などの和菓子まで、多くの食べ歩き食品が売られている。もちろん、椅子に座って食べる人もいるが、歩きながら食べている人も多い。まち中で食べ歩きをすることは、現在では当たり前の光景であり、食べ歩きができるまちは、観光スポットともなっている。

宇都宮は、「餃子のまち」と食で売っているのだから、「食べ歩きのできるまち」として売り出すことも十分に可能と考える。釜川の沿川などまち中のいくつかのゾーンを食べ歩きゾーンとして指定し、たい焼きやシュークリーム（現在、釜川の近くには、たい焼きの店とシュークリームの店がある）などを食べながら歩きやすいようにすることが考えられる。そのためには、ゴミ箱等の配置や、ちょっと座れるベンチの設置等が必要だ。当然であるが、食べ歩きに適した食品をこれらのゾーンの周辺で集中的に販売することも必要である。

さらに、宇都宮名物の餃子を食べ歩きできる形で販売することも検討すると面白い。単に、パンなどに餃子を挟んで食べるのではなく、そのまま手に持って食べられる餃子が開発できると、食べ歩きができる餃子のまち—宇都宮—という新しいイメージを作り出すことができる。唐揚げや焼き鳥などは食べ歩きが容易であり、また、ピザも食べ歩きできるものが開発されている。食べ歩きは菓子類だけでなく、幅広いメニューが作れると考える。

・川や道路を使った線的に展開するイベントの開催

まちを歩きたくなるようにするためには、歩きながら楽しめるイベントが必要である。しかも、定期的に様々なイベントを行う必要がある。釜川沿いなどを会場として定期的にコンテストや展覧会などを実施する。定期的に開催することにより、会場に人が集まるようになり、結果的に賑わいを作り出すことができる。

・ペットを連れて歩けるまち

宇都宮のまち中には、ペット連れて歩いている人を見かけることが少ない。まち中では、城址公園や田川沿いなどの限られた場所でペットと一緒に散歩しているのを見かけるだけである。

これからの高齢社会では、ペットと暮らす高齢世帯が増加することは間違いない。高齢者がまち中を歩くためには、ペットと一緒に散歩ができることがひとつのカギになる。高齢者にまち中に出てきてもらうために、ペットと歩きやすいまちとすることが重要である。

宇都宮のまち中でペット連れて歩く人が少ない理由は、自転車などの走行でペットを連れてゆっくりと歩けないからである。高齢者自身、自転車がスピードを出す歩道を歩くことは危険であるが、ペットにとっては、この危険性はさらに高くなる。自転車などに邪魔されないゆっくりペットと歩ける道の整備が必要である。釜川などをペットと歩ける道として指定し、そのための仕掛けを作ることが有効である。ペットと散歩する人は朝と夕方に多いが、川沿いをライトアップするなどにより、夕方暗くなった時点でも散歩をすることが可能となる。

まち全体をペットと歩けるようにするのは、すぐには困難と考えられるが、ペットと安心して歩くことのできる城址公園などへのつながる道路などから優先して整備を進めれば、一部の整備であっても効果が大きいと考えられる。

以上、宇都宮を歩きたくなるまちとするための方策を述べてきた。ここで、釜川を対象に歩きたくなるまちについて考えてみたい。釜川沿川は、すでに歩きやすくするための工夫は相当程度行われている。そこで、ここでは、歩いて楽しいという側面から考えることとする。

4.2 釜川マルシェ計画

釜川は、言うまでもなく、宇都宮の中心市街地を流れる貴重な河川である。釜川は二重構造になっており、川のせせらぎを感じられるように工夫されている。また、河川沿いには多くの樹木が植えられ貴重な緑の空間になっている。花壇なども作られており、四季折々の花も咲いている。釜川は、歩きたくなるまち宇都宮を実現するために重要な資源である。

私たちは、この釜川をさらに魅力的にし、より多くの人に歩いてもらうために、「釜川マルシェ計画」と銘打って提案する。「マルシェ (marché)」はフランス語で市場を意味する言葉であるが、釜川におしゃれなイメージを与えるために、この言葉を採用したい。

釜川は、宇都宮市民にとって必ずしも、散策路として意識されていない。しかし、釜川は、宇都宮市の中心市街地の真ん中を横切っている貴重な空間である。まち中のかなり長い距離を川が流れており、これを線的に活用することができれば、まち中を歩く人の流れを作り出すことができる。「釜川マルシェ」という新たな名称を付けることで、人々の注目を集め、釜川を歩いてみたいという気持ちを持たせることができれば、中心市街地の歩行者増大に大きく寄与することは間違いない。

《釜川マルシェ計画のための仕掛け》

・おしゃれなカフェやレストランを設ける

川を感じながらお茶を楽しむことができる。

カフェに限らず、レストランやおしゃれな店（小物等を販売）なども川沿いに適している。季節の良い間は、川沿いにオープンカフェを設けるとより川に親しむことができる。

・日曜市などを開催する

川沿いに定期的に市場を開く。日曜市などの臨時の市は日本のみならず世界中で行われている。地域の産物などを目当てに多くの観光客が訪れるものもある。

宇都宮の特産品を定期的に並べて販売したり、フリーマーケットのスペースを設けたりと様々な形態が考えられる。

・川を飾り付ける

川沿いに集中的にモニュメントを設置する。あるいは、季節ごとにテーマを決めてモニュメントを入れ替えやライトアップを変化させる。

*川沿いのオープンカフェの例



写真13 広島市京橋川のオープンカフェ

*日曜市などの例



写真14 パリの街角の朝市



写真15 ロンドンの日曜市



写真16 高知の日曜市

5 おわりに

私たちのゼミでは、提案に当たり、宇都宮のまち中をはじめ、いろいろなまちを実際に歩いて観察してみた。様々なまちで、多くの人にまちを歩いてもらえる仕掛けが施されていることを感じた。本提案では、宇都宮のまち中に適用可能な施策のいくつかを提案したが、歩きたくなるまちとするための工夫は、今回提案した以外にも数多くあると考える。これからも、まちを実際に歩いて観察しながら、歩きたくなるまち—宇都宮—の実現を目指していきたい。